

ほない歴史通信

第30号

2004, 3, 1

大子地方の歴史と風土

（三十号発行に寄せて）

県の最高峰八溝山の東斜面に位置する大子地方は、東側を久慈山地、西側を八溝山地がそれぞれ南北に走り、その間を久慈川の溪谷が南北に続いていきます。これらの山と川が大子地方という地域を形成しており、ここに大子地方の歴史と風土を生み出したフアクターがあるといえましょう。

風土はその地域の土地の状態、気候とか地味などをいいますが、風土が問題になるのは、そこに住む人々の生活、気質などに影響を与え、ひいては文化の性格を決定づけるからです。

昔は、人々の生活は、自然環境によって決定づけられる面が大きく、山に囲まれ、交通機関が発達していなかった時代の大子地方は、政治文化の中心地からみれば僻遠の地であり、閉鎖的な中で生活は、住民の視野がせまく、生活の形態にしても、その中身をなす感情の動きにしても、昔のまま保存し、他からの転入者に対しては、警戒心がはたらき、一方では珍客として迎え、親切をつくし、一步中にはいると感情的に受け入れられない面や理解するまでには時間を要するという面があったと思います。

しかし、地域住民の生活や気質は、世の中の発展とともに他

地域との交流や宗教、文明の移入などによって物質的生活を発達させ、精神面では生活の合理性を高めてきました。住民の生きる力は、長い歴史の中で培われてきたのです。

大子地方に文明の光を投じてくれたのは鉄道の開通です。昭和二年（一九二七）に常陸大子駅が開通し、同九年には全線が開通しました。鉄道の開通は住民の悲願でありました。かつて大子小学校の西の一隅に、水郡線の全線開通に努力をした根本正の胸像が大子駅舎を見下ろすように立っていました。現在は胸像はなく、塔柱と台座のみが残っています。その塔柱の正面に根本の功績をたたえた開通時の鉄道大臣元田肇の七言絶句の漢詩が刻まれています。その漢詩の一節に「百貨輪来一瞬中」「溪山到处入春风」とあり、大子地方のいたるところに文明の光が輝きはじめたことを表現しています。

大子地方の人々は、山川という風土がもたらす豊かな資源を生かしながら生産活動に当たってきました。盛衰はありましたが、基幹産業としての農作物、工芸作物の栽培、畜産、林業の銘柄化と林産物の開発、風光明媚な自然を生かした観光地づくりに、地の利を生かしながら産業や生活・文化を育ててきたのです。

さて、「ほない歴史通信」であります。今から六年前の一九九六年十二月に第一号の産声をあげてから、本号で三十号を数えることになりました。会員の強い問題意識と相互の協力、読者の励ましとご支援により続けていくことができました。この節目を機会に大子町広報紙に掲載してきました「大子の歴史散歩」と「保内歴史通信」へ執筆されました会員並びに寄稿者の原稿をもとに『新大子風土記』の出版を、本年九月に計画しています。読者の皆さんのかわりないご支援をよろしくお願致します。

（小澤）

心に残る風景から

・ ・ ・ 私の大きいはじまる ・ ・ ・

瀬谷義彦

奥久慈、そして袋田の滝 ・ ・ ・ 心に残るその風景が、私の大きいはじまりである。

今から、七七年ほど前、昭和二年三月下旬、父に連れられて私は、開業したばかりの袋田駅に降り立った。

駅舎は奥久慈の山々を望む広場に、ぼっねんと建っていた。そこから袋田の滝への道を歩き出した。車もバスもない当時である。あれが久慈川か、あそこが鰐ヶ淵（そぶち・しよぶち）か、などと父が呟いた。上から覗くとぞっとする。

草葺の家並の前を過ぎるでこぼこ道は、田舎育ちの私には珍らしくもなかったが、午後の陽光を浴びて、月折を望むあたりの風光は、未知の里へ来た感じにさせてくれた。

左右を見ながら、下駄ばきの足は軽く、心温まる気分だった。私にとって、それでなくとも、嬉しい一日だったからだ。私の生れた県北多賀郡鮎川村成沢（日立市中成沢町）の北隣りの日立町に、多賀郡ではじめての県立日立中学校（今の日立一高）の創設がきまり、開校は昭和二年四月ということになった。三月はじめて行われた入学試験に、私は合格した。三倍近い志願者があったらしい。郷里の小学校では一人受験して合格者は二人だった。

その合格祝いに、父が計画したのが袋田の滝見物だったのである。生れてはじめての父との旅だった。今なら日立から車で三時間間あれば、滝を見て帰れる。旅などと大げさな言い方はおかしくなる。

早朝家を出て滝についたのが午後の一時過ぎだったろうか、常磐線で水戸で乗換えて一たん菅谷で下車、駅前の食堂で生れてはじめてのライスカレーの味は忘れられよう。

大子までやっと開通した水郡線の車窓には、珍らしい風景が続いた。久慈川の清流、ふくらみを見せ始めたような木立の美しい山々、奥久慈の風景は、私には天下の絶景のように思われた。

なぜ袋田の滝だったのか。後で分ったことだが、父の書架に大町桂月の本が何冊かあるのを知った。私の従兄、つまり父の甥が県立太田中学（今の太田一高）生の時、親代わりで父兄会のようなものに出席して、当時の校長先生（伊藤正弘）が大町桂月と東大時代同窓だったというので、太田での桂月の書の販布会に招かれ、そこで手に入れた掛軸を持っていた。

そんなことで、奥久慈の風景を天下に紹介したのは桂月先生だとよく言っていたのを覚えている。袋田の滝への道はかくて実現されたものだろうが、それを促してくれたのは何といても水郡線の開通である。

水郡線の実現が、大子地方、保内郷の人びとの長い間の夢だったことは、後年茨城大学と一緒に教鞭をとることになった中川浩一教授の本や、『大子町史』などによって詳しく知ることができた。

その水郡線がやっと難工事の末、大子までできたのが昭和二年三月だったから、それがうまく、私の合格祝いにチャンスを与えてくれたことになる。

やがて草履を貸している茶店についた。滝は見えないが、地ひびきのように滝の音が聞こえてきたような気がする。胸がドキドキした。

後年袋田温泉が、県内初めての温泉として開業した時、郷土史家として著名な水戸の前田香径さんが、昭和十一年作った「袋田温泉小唄」の中に、

並ぶ滝茶屋 どの娘が貸した

紅い鼻緒の ぬれ草履、エエぬれ草履

という一節がある。昭和二年当時は、何軒も滝茶屋（店）があった記憶はない。ともかく下駄をあずけて草履で滝の川を、石を踏み越えながら、滝壺が目下に見える大きな岩場にたどり着いた。初めて見る滝、見上げる滝の壮大な景色には、何と違ってよいか分らぬくらい感動した。滝のこう音が一瞬自然の奥に消えたような記憶もある。

私は父の後に於いて左の崖を鎖を伝わって登り、小さなお堂に詣ったことも忘れない。帰りのことは余り覚えていないが、草履を借りなければ、とても歩けなかったことを実感した。

後年私は涼風の滝、赤とんぼが滝壺に消えた紅葉の滝、そして凍て滝なども見た。その多くは滝見トンネルを利用してのことだったように思う。

今は門前町のように、滝の方に向う道の両側に並ぶみやげ物屋などを見ると、昔の滝茶屋のたたずまいがなつかしい。

いつかわたしは氷った滝を見た時の感動を、こんな俳句にうたってみたことがある。

谷つきて氷瀑天に連なれり

トンネルをぬけての観瀑では、「谷つきて」という実感は、私には湧いて来ない。それは川を渡り、大石を踏み越え、自然の中での滝見だったからこそ、谷の奥という、太古からの自然に出逢うことができたのだ。それが心に残っていて、後になって一句の中に甦ったことになる。

かつて県の文化財保護審議会委員の一人だったころ、観瀑トンネルの可否について諮問があった。袋田の滝は、県の名勝に指定されているからである。大子町役場からの造成の理由を述べた申請書を吟味した結果、満場一致で可と答申された。

それより以前、県観光審議会の席上、観光施設と自然破壊について討論があった。それは、県外の話であるが、ある名勝指定の

山にケーブルカーを設けることの可否であった。私は自然破壊として反対論を述べた。それに対し、県内交通観光界の代表だったＴ委員は、賛成意見で、高齢者や障害者の願いを、叶えてやり度いという理由だった。

私はそれ以後、自然との調和を考慮したうえのことだが、教條主義的態度を深く反省した。

それは春だったか、トンネルを抜けると、滝に向ってじっと佇んでいる若い男性の後姿が目に入った。よくみると片手を手摺に、片手に白い杖があった。やっぱりよかったのだと、私は思った。

心に残る奥久慈の山河、そしてその奥にとどろく四度の滝の絶景。その帰りの汽車で、私はまた忘れられない光景を目撃した。

西金の駅を発車したと思った瞬間、列車がとまった。何かと違って左座席の窓を開けた。駅舎を見下ろす土堤の上の道を、一人の老婆が手を振りながら叫んでいるではないか。機関士はこの老婆に気付いて、ちょっと待つことにしたのだ、とすぐ分った。

待ってと手を振る老婆の感覚、手をとめる機関士の行動、今なら問題にされそうだが、私は奥久慈の大自然の中で起った、この一瞬の出来事は、私には生涯忘れようとしても忘れられない。初めて見る奥久慈の風景と切り離すことのできない、奥久慈の自然と人間との融和の美学である。

それから二、三ヶ月後、小学生時代着物で通学した私は、初めて身につけた中学生の洋服姿で、東京日日新聞を開いて、とび上るほど嬉しかった。袋田の滝が日本八景投票で滝部門で第一位、日本二十五勝の一つに選ばれた記事を見たからだ。父も喜んだ。私も自慢げに学友に話した。

それから長い間、大子は私の視野に入らなかつた。はつきり覚

えているのは、戦後の大子である。茨城大学が発足してから私の戦後の研究は、水戸藩の郷土から始まった。藩初期の旧族郷土では、どうしても大子の益子家を見逃すわけにはいかない。大子一高（大子小学校）のある高台の一隅に、益子民部家を訪ねた記憶では、暗い歴史の一面が残っている。晩秋の午后、うす暗い一室でご主人から見せて頂いた史料は、郷土関係の中で、特に幕末反天狗派の有志に数えられて、土地財産を没収された欠所の記録は、痛ましいものであった。

郷土といえば、戦後県内各地で行われた所謂認定講習で、数日旅館に泊って大子小学校の講堂で講義を続けたある日、佐貫の町島さんから、水戸藩の郷土名簿を拝借して、一夜、宿で筆写した思い出はなつかしい。

今の茨城地方史研究会の前身、近世史料調査会で最初の大きな調査では、大子の黒沢中学校の一室に、学生十数名をとめて頂いた。今の会長の佐久間好雄氏を中心に、大子駅から各自米や毛布などを持参して、坂道を歩いたことを思い出す。主として各集落の検地帳、年貢免状など、農村史料の調査であった。また、斉昭ゆかりのケヤキ御殿旅沢家のことなど忘れられない。その他飯村家・高梨家・菊池家など、調査先ではみな親切にしていた。これらは次の調査だったかどうか、私の記憶からでは、はっきりしない。

これらはやがて私たちが、『大子町史』の編さんに関係する契機となったものではないかと振り返る。それについては生瀬の旧家で助役をつとめた益子公朋さんの思い出など限らないが、それは他日に譲ることにして、一つだけ紹介して置き度いことがある。

『大子町史』の上巻編集の時、私は大子の自然で、他に余り見られない、隠れた風物詩、シガについて詳しく紹介してほしいと要望したところ、笠井勝美氏が専門の書場で、昭和五十九年二月

三日、四日の大子町松沼橋付近のシガの発生図を交えて、記述して下さった。私も町史編さん中、宿を出て朝、シガの流れを見たことがある。その時の心象風景も交えて、次のような句を作ってみた。

山越へて逆光氷花^しを把へけり

私は敢てシガを氷花と書いてみた。

さてもう一つ大子の自然の中から、河鹿の声を記しておこう。

今、袋田温泉ホテルの前に建つ歌碑に、

河鹿鳴く山川みつのうきふしに

あはれは春の夜半にもぞ知る

と刻まれている。これは、桜田事変のリーダー関鉄之介を、事件後袋田地方に身を隠していた当時、温かくかくまってくれた袋田地方の人びとの心が、そこはかとなく察せられるうたである。

私は何回も大子の川で河鹿の声を聞いたことがある。大子といえは「河鹿の里」とも言いたい気持ちでいっぱいである。

実は私の岳父佐藤甲は長く旧制水戸中学で博物を教えていたが、いつか植物採集の折に、大子の川で河鹿をとり、水戸の家にもち帰って容器の中で養っていたことがあるらしい。その餌付を毎朝やったら私の妻が話してくれた。妻は、今でも時折り思い出して涙ぐむ。そして河鹿はもとの川に戻してやったという。

私の大子はこればかりではない。八溝山と八溝石、茶畑からリソゴ、近津神社の大杉、貴重な郷校の遺構「大子文庫」、月折峠の旧道、大子町史編さんでの史料調査、その他思い出は限らない。そうした生涯忘れられない私の大子は、心に残る風景にはじまり、さまざまな人間模様^しに彩られている。

（平成十六年一月記）

暖かいふるさとづくり

益子和氣子

「今の望みは何ですか」という私の質問に、「それは家に帰ることです」。即座にそして静かに答が返ってきた。或るハンセン病回復者の婦人である。「家に帰る」という当たり前のことが出来ない。その短い言葉のなかに、行動を束縛された今までの長く苦しかった思いを感じ、涙が出そうになるのを必死にこらえていた。大子町地域女性団体連絡会として五十年余り毎年、療養所慰問を続けていたうちのひとこまである。

昭和二十年、日本は建國以来初めて敗戦に直面し、二十一年から進駐軍の政策により、大子町に次々と婦人会が誕生し、二十五年に大子町婦人団体連絡会が結成され、以来五十有余年、「婦人の地位向上と明るい家庭、住みよい地域社会づくり」を提唱し実践活動をしてきた。

青少年育成、保険福祉、環境保全、北方領土返還要求運動、ハンセン病療養所慰問は今なお続いている。

最近、ハンセン病予防法は廃止されたが、今なおホテルの宿泊拒否など偏見がなくなつたとは言えない問題が起きている。私達は茨城県人の入所している療養所五カ所位を交互に慰問しているが、「茨城辯を聞くのが嬉しい」と喜ばれ、お話し合いい、カラオケをしたり、また生家のお墓に入れない患者さんのため霊安室をお参りしたりしている。最近、東村山の全生園に記念碑が建ち、茨城県人会長の平沢様が語り部として懸命に説明され、当時の苛酷な生活ぶりに言葉もなく見学した。

或時、平沢様に「若し茨城県で平沢様の講演をお願いしたならば、やって頂けますか」と尋ねますと、「私のふるさとですから喜んで伺います」と即答されたので早速受け入れ準備を

し、水戸で七百人集会のもと講演会を開いた。日本全国どこへでも出かけ、また外国まで行って話をしても、ふるさと茨城へは入れなかつたという平沢様は秘めた想いが甦るように語られ、赤城の子守唄まで歌われ、ステージをおりても会場の中を歩き廻り、皆と握手をしたり話をしたり興奮気味でした。

その後、毛筆の達筆な礼状を頂いた。「水戸の講演は嬉しかった。その後、茨城県内から何カ所も講演依頼があり忙しい。しかし自分のふるさと、そして母の墓参りは出来ない。講演に行く時、列車の窓から母の墓のあるお寺が見えたので『母さんごめんね。でも頑張ってきたと一度はお墓参りに行くから』と心で謝りながら通過した」と記されていた。実に半世紀にわたる私達の地道な活動が療養者にとって、いくらか心の慰めになれたら幸いです。

また北方領土返還要求運動促進のため歯舞昆布の販布をしたり、会員四十五名で根室市まで行き説明を聞き、更に目前に見える北方領土を眺めながら、終戦後一週間たつてから島に上陸し島民を追い出し占拠してしまつたソ連に憤りを覚えた。早期の領土返還の実現を祈っている。

最近、社会の変化に伴い、家庭崩壊、青少年の非行、環境破壊など憂うべきニュースが多い。私達は大子町に今なお残っている隣組的連携、そして地域ごとに集会所や道路、駅前清掃などを行ない、町の浄化と共にコミュニケーションを計って来た会活動が原点であることを再認識したい。

ハンセン病回復者の望郷の念、家も墓地も捨てざるを得なかつた人達の北方領土への想いを考え、私達は何気なく過ごしてしまつたふるさと大子の良さ、ありがたさを見つめ直し、更に、町民ひとりひとりが他に誇れる暖かいふるさとづくりを心がけたいものと思う。

八溝かたつむり学校

誕生

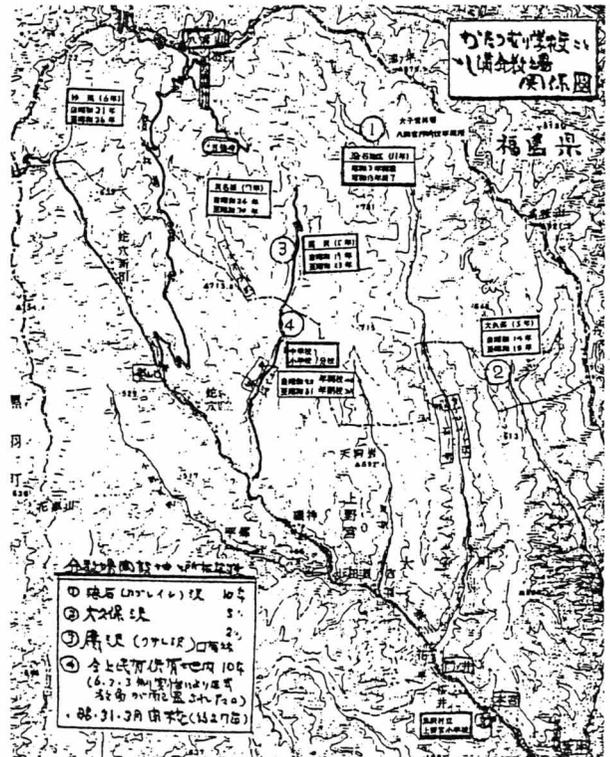
水郡線の開通見込みがついたことで、大子営林署は待望久しかった八溝山開発に踏み切り、昭和三年に始動し、同四年上野宮地域碓石沢の奥地約七キロメートルの地点に「八溝官行斫伐事業所」を開設して、約二十世帯の作業員を上山させた。

百人ほどの集団生活なので、とかく不自由ではあったが、最関心事は子弟の教育であった。関係機関の折衝の結果三年生以下の生徒に限るものとして分教場の開設が認められた。即ち「八溝のかたつむり学校」の濫觴である。教師は事務所の職員が県より委嘱されて兼任した。生徒数は毎年七、八名であったとのこと、高学年は本校まで八キロほどの道のりを通学した。朝は徒歩、帰路は「返しトロッコ」の乗せてもらったりしたが、そこは山の子供らしく健脚ぶりを発揮した。こうして各父兄は外患をはなれて稼業に専念できるようになった。

大久保沢で五年

昭和十四年はじめ、事業地の移動に伴って、分校も「かたつむり」よろしく大久保沢約五千五百メートルの地点に引越した。四月から開校したが、ここは環境もよく、山の幸、川の幸にも恵まれ父兄の生活もまだ安定していた。

子供達は勉強が終わるとまっすぐに家に帰る。家と言っても今にして思えば、まことにお粗末な小屋がけの家で、間仕切りも無い生活であったが、山には山の暮らしがあつて、それなりに楽しい日々を過ごしていた。昨今の様に家庭学習をするわけでもなく、帰宅後の遊び場所はたいいてい親の仕事場である。そして夕刻になると木炭を一俵背負わされて、親に先立って帰ってきた。その姿は幻の有形文化財的であった。高学年の子弟も休校日には親の手にをしながら、何時しか



その手法を習得して跡継ぎの道を歩んでいた。

昭和十六年、米・英両国との開戦によって情勢は一変し、人々は総じて苦難の道を迎えることとなった。山の人達も食料をはじめ、あらゆる物資不足に陥り、いたいたいけない子供にまで「欲しがりません勝つまでは」の戦時下生活を押しつける事になったのである。

腐沢奥地に二年、そして八溝分校に

昭和十九年、開発区域は腐沢奥地に移動し、分教場もまた腐沢事業所近くに引越した。そして例の通り授業も続けたが、二年目に至って大転換期が訪れたのである。

戦争は終結し、新指針による学校教育法が公布され、六・三制が実施されて、分教場に新制中学校を併置することになり、校名も八溝分枝 改められたのである。校舎新設には村

当局も仲介して、マナイタ沢入り口の民有地に小中両教室を備えた「鍵の学校舎」が建築された。小学校には本職の教師が赴任し、中学校は営林署職員が担当した。在校生は小学生九名、中学生五名だったが、はじめて公立の分校として扱われることとなった。

このような経緯で昭和二十四年四月制度を新たにした分校の開校を見たが、この時点で「かたつむり学校」は「やまびこ学校」に変身したのである。

新しい発足を見た八溝分校ではあったが、その後二、三年はきわめて苦難日々を過ごしている。戦後における国民生活の荒廃は戦中にも勝るもので、物資の欠乏、特に食料の不足



開校式記念 (昭31. 3. 24)

は目を覆うばかりであつた。とりわけ田畑を有しない入山者にとつてはまことに深刻で、春先には女子供総動員で山の幸、つまり「わらび・ぜんまい・やまごぼう・うど・やまいも・ふき」の類まで、およそ口に入るものはすべ

て採取した。そのため生徒の欠席は増え、中には山を下りる者も出る始末であつた。

昭和二十年代の後半になると、国民生活も安定の方向を辿る様になり、「民主教育」も軌道に乗って、従来日の当たりにくかつた部分が見直される様になった。僻地教育問題なども積極的に取り上げられて、八溝分校もにわかには脚光を浴び、斯界の来訪者がとみに多くなつた。昭和二十九年半ば、あるフォトグラフ社によつて、全国に紹介された直後などは、各地ボランティアからの贈り物が山と積まれたものである。分校見学者も多くなり、この分校が僻地教育研究会の会場となつたこともある。

かたつむり学校の終末

昭和三十年、この年末をもつて腐沢全域における開発事業が終了して、事業地は本件地籍最西北部の妙院地区に移ることになった。栃木県境位置する最奥地である。このため教育の場を四度移転することは世の常識に逆行することもあつて、関係者は等しく躊躇、各機関と協議の結果、「分校を廃止し、町付地区に子弟合宿所を新設する。」事で合意した。かくして、八溝分校は廃校となり、昭和三十一年三月末、開設以来二十七年の歴史を閉じたのである。

開校式は三月二十四日、分校で行われ、ラジオ東京を通じて「山を降りるかたつむり学校」と題して全国に放送された。分校の校舎は町付小学校の近くに移転改造されて、子弟合宿所「若木寮」として再生した。生徒は黒沢小・中学校にそれぞれ編入されたが、小学生七名、中学生四名計十一名であつた。永い間僻地教育に当たられた薄井先生は、これを機に退職され、那珂郡大宮町に安住して余生を送ることになった。

(鈴木三郎)

ことが知りたく、手古屋沢の奥、久隆への路を入った所に鉾山の閉鎖を記念して建てられた記念碑を見たいと思っていた。さらに、当時この金山で働いていた知人の話も聞きたいと思っていたが、いつしかその機会を逃してしまい、今は心当たりの人も他界されてしまったので、話を聞くことを断念していた。

ところが、である。当時金山で働いたことのあるお年寄りが健在であることを知ったのである。金山跡のすぐ近くで、息子さんやお孫さんに囲まれて元気に過ごしている笠井カノさん（八十八歳）がその人である。早速カノさんに連絡をとり、記念碑文も一緒に写し取ってこようとカノさん宅を訪れた。本稿では、碑文に基づいて金山の状況を概観しながらカノさんの話を紹介したいと思う。

記念碑は、昭和十八年十月に金山沢鉾山閉鎖を記念して、東京鑛山監督局長が撰文建立したものである。碑文によると、昭和三年に関係者が金山沢外四鉾区を出願した。その後六年におたって探査した結果、旧坑を発見して金山坑と命名し、産出した鉾石は日立鉾山に送鉾した。さらに金山坑の掘下げ百八十尺（約六十メートル）、左右に坑道数本を開鑿した結果、年平均品位四十グラム以上となり、坑内に鉾石数百トンを保有するに至ったので、免許を得て精錬所を建設した。続いて金山沢鉾山に改称し、昭和十四年六月に採掘の許可を受けている。

カノさんがこの金山で坑員として働いていたのは、昭和十三年から十八年までの六年間であり、これは金生産が最も盛んだった頃から閉山までの時期でもあった。当時女子坑員は十人位おり、カノさんはその中の一人で、地下で掘り出した鉾石を木製の箱に詰め、それを背負い、地上の坑口まで運び出す役を担っていた。

(続く)

笠井さんが使っていた道具

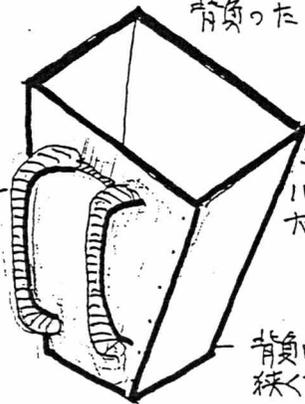
高さ20cmにも
なないカンテラは
内の壁面に掛
けられ用りをとつた。



坑内用カンテラ

カンテラの燃料は
カーバイト。手掛
けのカギは、坑内と
この壁面へも掛けら
れるよう工夫されている。

背負い箱は鉾石を
背負ったまま反けた。



この箱は鉾石
10キロ位入る
大きさである。

背負い箱の底は
狭くなっている。

鉾石を運ぶ背負箱

背負い箱は自転車
の
タイヤ

近況報告

—「ほない歴史通信」の志に触発されて—

桜庭 宏

年頭にはご賀状を、また発行のたびに「ほない歴史通信」をお送りいただきながら失礼しております。三〇号の発行を迎えるのですね。持続する志と行動に敬意を表し、この通信が、「保内地域」で分かち合われ、地に注がれ、新たな流れを生み出すのを希っています。

当地は例年になく暖冬で、降雪も少なく周囲の山並みの様相も晩冬です。この地に移り住んで九度目の冬を迎えますが、年々寒さが緩やかになり、降雪は目に見えて少なくなっています。気温は「寒中」でも、二月中、下旬並みの日が多く、水道管の凍結警報がテレビやラジオで放送される夜もほとんどありませんでした。降る雪もパウダースノーとはほど遠く、湿りが多く雪掻きが厄介です。

気候の変動による自然環境の変化が、生活の実感として深く刻まれる時には、変化で済まされない課題を背負うことになる、といった話を聞かされてから久しいのですが、どうやら私たちは岐路に佇んでいるうちに、残されていた選択肢を少なくしてしまった、と自問する日々です。「繰り言」は止して近況をお知らせします。

昨春秋、言い出しつべの私が発行人となつて、歴史のなかの「いま」、そして地域の「これから」を考える雑誌、「挑水」を創刊しました。編集は、自律的な市民が集う「地域の情報を語る会」です。この会が、世事を「仕方ない、分かっている」、といった「訳知り顔に語る」風潮に棹をさすため、良質な情報に

向き合い、その担い手たちとともに「いま」を柔軟に読み解いていけたら、という思いを込めて出発したのは四年前のことです。分野や関心は違つても、地域の課題に持続して取り組んでいる人たちとのこの会での出会いが、私の「雑誌づくり」病を再発させたのです。

編集を担当した奥野進さんは、私がコピーしてさしあげる「ほない歴史通信」の読者でもあるのですが、「△グローバル化▽、△国際化▽、などによって、行動範囲や情報量、私たちの生活が影響を及ぼす範囲が広がる一方、身近にあったごみの行き先や野菜の産地などが遠のいていく。はるか以前から△地域▽が標榜されながら、むしろ次第にそこで暮らす△人▽とのつながりが見えにくくなり、衰退の一端をたどっているのが△地域▽の実態である」、と言っておられます(二〇〇四年一月五日付「北海道新聞」△夕刊・文化欄▽「△挑水▽創刊に寄せて」)。

創刊号の内容は多彩となりました。フランスや日本の「粟文化」を歴史的な視点から読み解いて現代を考える巻頭論文。一〇年前の寒い夏にご案内した大沼国定公園の湖畔に暮らしながら環境を見つめてきた一漁業家の報告。熊本、茨城、北海道などに建つニコラエフスク事件殉難碑を手がかりに、派兵、居留民、人権、地域、そして歴史の忘却などを見据える歴史論や今後の「アジアの時代」を想定して「過去の事実の共有」作業の一環である「東亜同文書院と茨城」。不要な貯水ダム建設を中止に追い込み、その後の河川施策に係わった体験から、市民と行政の合意形成にあたって「市民は何をなすべき」かの論点を示したもの。再三の現地調査と住民との交流から「パプアニューギニアの森」の現状と「私たちの暮らし」を問いかける報告。二〇歳代から水俣に住みついて、約三〇年余り続けている水俣病患者の支援や有機・減農薬の農作業などの協同作業を通じて、

地域のさまざまな課題と向き合っている方からの発信など、一人の執筆者が、生活の現場や根拠地に係る現状報告や地域の歴史の発掘などから「地域と人間」を語ってくれています。そしていまや言葉の飛び交いを終えて、地域や生活の全ての領域の構造に深く関わっている「グローバル化」とそのもとの「公共性」から「いま」を読み解くことを忘れてはならない、と強調しているのです。

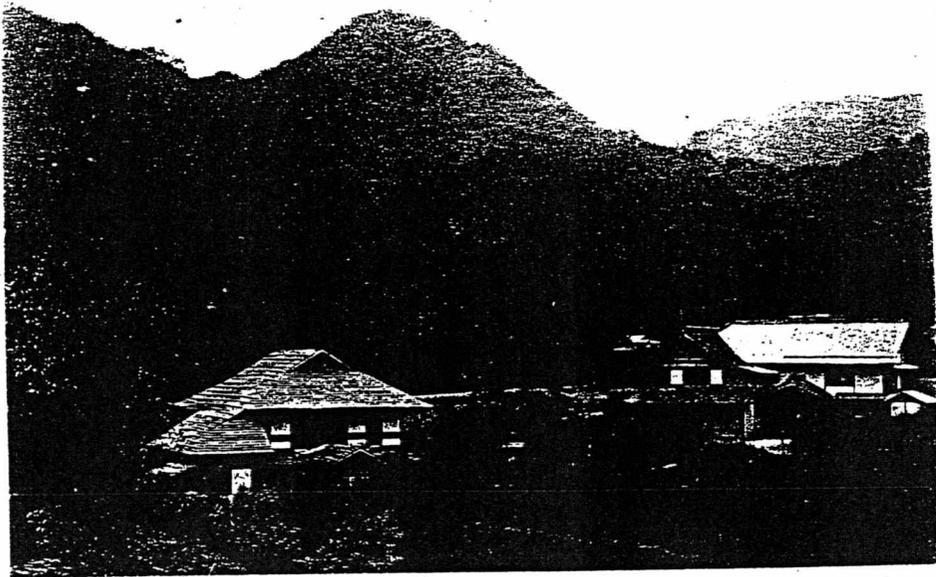
この様な多彩さは、いま「地域」を考えれば不可避免的に「地域」の外に及ばざるをえないからです。「地域」の時間と空間の多様で交錯した有り様を視野に入れる。それは、遠くの地域、自分の住む地域、その「地域」の歴史やそれにつながる「いま」を考え世界を考えることであり、私たちの生活の「これから」に係わることです。

「挑水」は「水を担ふ 水を汲む」（諸橋漢和）ことです。雑誌「挑水」が、読者、執筆者、編集者、印刷所、発行人が自ら汲みとって歴史のなかの「いま」と「これから」を考える精神と行動を担う一つの架け橋になっていければ、と考えています。「ほない歴史通信」にふさわしくない近況を書き連ねてしまいました。電話でお話し申し上げた、森の保全と再生に係る作業については、別の機会にご報告をしたいと思えます。余寒の折柄です、風邪など召されませぬように。乱筆乱文で失礼します。

（北海道亀田郡七飯町在住）

【ふるさと写真帖】

「常陸袋田の名勝」という名の絵葉書集（七枚組）の一枚。絵葉書の下には、「常陸袋田温泉」とある。袋田温泉は昭和十一年の開発によるものであり、その直後のものと思われる。



常陸袋田温泉

一橋様京都御用日記 (一)

幕末、外国船の渡来や、開国要求に始まり、国内は開国・攘夷に尊皇・佐幕論が絡んで、世論は紛糾し混乱していた。力の弱っていた幕府は国論を統一することは出来ず、外圧に屈して開国に踏み切らざるを得なかった。また、幕府に反対する諸国の勤王志士を捕らえて「安政の大獄」をおこす一方、皇女和宮の降下を策したりする。

京都の治安を守るために「京都守護職」「禁裏守衛」などの職を設けたが、治安の乱れはおさまらず、ついに会津の松平容保を京都守護職に任じ、元治元(一八六四)年三月、一橋慶喜に「禁裏守衛・摂海防衛」を命じた。京都に住む天皇はじめ公家達は、大阪湾に外国船が侵入するのを恐れていた。そのためこのような職を設けたのである。

禁裏は皇居、摂海は摂津の海(大阪湾)である。

一橋家は徳川御三卿のひとつで、十萬石の格式を持つが家臣の武士団は持たないという決まりであった。家来が無くては禁裏守衛は出来ない。そこで、慶喜は実家の水戸藩に頼み込んで家来を貸して貰うことにした。「兵食不足の身分、大任を蒙り・兎も角も実家の御厄介を以て相勤め候外無之・都合宜敷候はば勤王正義義勇の者、武術成熟の者、人数二三百人ばかり相養い申したく、周旋頼み入り候」、これが慶喜が水戸藩に出した手紙である。

水戸藩でも、藩主慶篤が家臣千余名を率いて上京している。武田耕雲斎は領内各地から郷士等を召集することにした。

大子地方に残されている文書によれば、「この度一橋様御守衛京都表へ御指登りに相なり候条、その旨相心得来る二十六日方迄に御役所へ到着いたし候様・・」という命令で、桜岡源之充(袋田)・河合伴次郎(西金)・益子礼之介(大子)・柏五郎兵衛(高柴)・谷田部豊三郎(小生瀬)・佐川忠兵衛(小生瀬)・岡山織之介(田野沢)の七名が召集された。この時水戸領内からは合わせて百六十二名の郷士・神官・農民等が召集されて上京した。

その中の高柴の柏五郎兵衛は「一橋様京都御用日記」を残している。

この日記によれば、元治元年四月二十四日に通知を受け同二十八日に水戸に勢揃い、出発。五月二十四日京到着



ランプから電灯へ(四)

—未点灯集落解消への取り組み—

電気が供給されない、いわゆる未点灯家屋の多さでいうと茨城県は全国でも有数の地帯であり、その茨城県にあつては、久慈郡に最も集中していた(本誌第二五号参照)。

では、久慈郡における大子町の状況はどうだったのだろうか。合併前、一九五三年五月末時点の未点灯戸数は、下小川村四一五戸を筆頭に生瀬村二四八戸、黒沢村二〇五戸、上小川村一八五戸、袋田村八四戸、宮川村七九戸、大子町五〇戸、佐原村四〇戸、依上村三六戸で、総数一三四二戸を数えた。とくに上位にある下小川、生瀬、黒沢、上小川の四村の多さは久慈郡でも際立っており、下小川村の場合総戸数に占めるその比率は五五パーセントにも及んでいる。もちろん、県内随一である。五五年三月の合併によって生まれた新生大子町については、同年十月末の未点灯戸数が判明する。多い順に列挙すると、下小川地区二一七戸、上小川地区一一七戸、黒沢地区六七戸、生瀬地区五六戸、袋田地区三五戸、佐原地区一九戸、宮川地区七戸、依上地区五戸、総数五二二戸であつた(「広報だいご」第五号)。

この時期、電気導入事業に対しては長期低利の融資制度があつただけだが、各地区とも未点灯戸数は大幅に減少し、なかでも大子地区は皆無となつてゐる。

融資制度のほかに補助制度が新たに導入され、未点灯集落の解消をめざす本格的な動きが出てくるのは一九五九年度からである。その年度当初の四月、大子町域にはなお三一九戸の未点灯家屋が存在していた。その内訳は、下小川地区一五八戸、黒沢地区七五戸、袋田地区三五戸、上小川地区二七戸、宮川地区

二四戸である。この時点で佐原地区と依上地区が皆無となり、両地区の未点灯集落問題は解消するにいたつた。

さて、国と県の補助を受けて電気導入事業を行う場合、対象農家は少なくとも五戸以上でなければならなかつた。一九五六年に大子町役場に就職し、六〇年から産業経済課農務係に配属となつて当該事業の推進役を担つた菊池輝雄氏の証言によると、事業の発端には、町が作成した導入計画に沿つて呼び掛ける場合と対象地域の住民が提案する場合との二つの形があつたといふ。いずれの場合でも事業の成否は、集落をまとめ、全世帯の参加が得られるかどうかにかかつていたから、反対者を説得し合意を取り付けることが最初の大仕事であつた。反対の主な理由は、経済的に余裕がないので負担金が払えない、電気がなくても生活できる、というものであつた。またある集落では、他の家で使うと流れてこないという共同水道の経験になぞらえて、電気も同様に途中で他の家を使うと自分の家まで届かないのではないかと思ひ込み、反対する住民もいた。菊池氏は、時には地元の役職者と一緒になつてそうした反対者を一人一人説得したり、集落をまとめるために協力的な組織を発足させたりもした。問題の負担金については「融資制度があるよ、と。孫の代までかかる金じゃないからやつてくれよ」、と話したといふ。

合意が得られた後は、事業計画書の作成に入る。農山漁村電気導入促進法は「営利を目的としない法人」を事業主体にするとしていたので、大子町の場合は当初は各地区の農協を、また農協合併後の一九六二年度からは大子町農協をその役に当てる。融資の手続き、補助申請の手続き等で茨城県と折衝したり、電線のルート設定や電柱の配置など費用の概算については、大子町を管轄する東京電力大宮営業所と交渉することになる。事業計画書の立案も一仕事であつた。

(斎藤)

【史料紹介】

県立立大女子第一高等女子学校創設期 の感謝状について

昭和二十二年四月、県立大子農林学校（旧中等学校）に赴任した神永校長は、「新制高校にふさわしい設備改善」事業計画を進めた。翌二十三年には、名称は県立大子高等学校と改められ、二十四年には大子第一高等学校と改称、農業科・林業科に、新しく普通科を併置、定時制課程を新設した総合高校としてスタートする。二十五年十一月、新制高校の「校門」が竣工したのを期に次の感謝状が出されたのである。

感謝状

大子町 益子善次衛門 殿

曩に本校増築の議起るや卒先講堂一棟及び運動場四千坪今回更に校門の御寄贈に與る
本校今日の躍進は寔に貴下の篤志に負う所極めて大であり
擧校感激景仰する所である
よって校門竣成を期とし茲に改めて深厚なる感謝の誠を捧げる

昭和二十五年十一月十七日

茨城県立大子第一高等学校長 神永政好

さきに、本校増築の議、起るや、そつせん、講堂一棟、および運動場四千坪、今回さらに、校門の御寄贈にあずかる。本校今日の躍進は、まことに、貴下の篤志におうところ、きわめて大であり、擧校、感激、けいぎようするところである。よって校門の竣成を期とし、ここに、改めて、深厚なる感謝の誠をささげる。

この感謝状について『八溝 八十年のあゆみ』は、次のように、益子氏の学校に対する思いを述べている。

◇昭和八年を最後に県会で立ち消えになっていた本校の拡張問題はその後懸案事項として地元や学校関係者の間で努力が続けられていた。・・・昭和十五年九月大子町益子亀松氏より講堂一棟（七五坪）の建築費として金一万五千円の寄付の申し出があり、昭和十六年三月地元負担金四万四三七七円を県へ納入し、十三年ぶりに解決したのであった。・・・本館一四二坪の工事は昭和十六年ころからはじまり、十七年四月までには完成していた。・・・昭和十七年講堂の建築がはじまると益子亀松氏の子息善次衛門氏は七五坪の土台基礎を見て樽川校長に「将来の学校発展を考えた場合、この建坪では狭隘ではなからうか。近い将来増築する見通しならばこの際増築して進ずる。」と言ひ、早速一四坪を追加して寄付した。内部材料も氏の貯えておいた金砂杉の設計より良質な材を用意して造作した。講堂は翌十八年に完成した。・・・こうした校舎増築の進展にともない、昭和十六年四月一日より生徒定員一五〇人を三〇〇人とし、校名を昭和十七年四月一日より茨城県立大子農林学校（それまでは大子農学校）と改めた。

◇昭和十八年秋、軍事教練の査閲が本校で行われた。その時、来校して参観していた益子善次衛門氏が三〇〇名の生徒が九〇〇坪の運動場で分列行進しているのを見て「いかに立派な教練でもこの運動場では余りに狭隘すぎて成果を挙げることが困難であろう。前面一帯の田畑を運動場として寄付するから購買手続きをとりたい。」と申し出た。・・・一町二反（三九〇〇坪）の埋立て工事を生徒の勤労奉仕で行なった。これが完成すれば運動場は三倍になり、拡張工事は敗戦までに完成せず戦後もひきつづき行われた。

（野内）

趣味は読書

文字を追うと目にやさしく、聴くと耳ざわりがよく、言葉にして言うとは知性と教養に満ちあふれているようなイメージを抱かせる文言である。

かつて、友人から娘さんの就職の世話を頼まれたことがあった。大手企業の茨城支店の古い友人の支店長の所に頼みに行つたのであるが、彼曰く、「おまえの頼みでは無下にも出来まい一人ぐらゐの現地採用ならば俺の権限で何とでもなるが、果たしてその娘の面接はおまえに任せる。おまえがYESといえれば採用するしNOといえばそうする。」と下駄を預けられた。イヤ～な気分になったが、とにかく会社の応接室に来てもらい面接することになった。

このとき私は、一言だけ質問してみようと決めていた。履歴書を見ながら「趣味に読書とありますが、主としてどの作家のあるいはどういう分野の本を多く読みますか？最近読んだ本三冊を言ってください。また今まで読んだ本の中で一番印象に残っている本の著者と書名とその理由をきかせてください」と。その時の、びつくりしたような彼女の表情。「何でそんなこと私に聞くのよ・・・」と迷惑顔ありありでした。後日、父親から娘が遠慮すると言っていると連絡がありました。

確かに「趣味は読書」いいものです。朝起きて新聞を読み、コンビニでマンガや週刊誌を買って読む、書店では単行本を立ち読みしてみる。これが果たして読書と言うものなのだろうか。趣味とよべるだろうか。況や読まないより読んでいただけマシだろうとは外野席の弁、「うんなるほど！」と納得できない性格、他人様からは最も疎まれる人間性の持ち主である。

ふつう趣味といえれば同じ目的意識を持った仲間がいたりライバルが友達だったりするものである。前述の範囲では趣味と言うより日常生活の一コマであろう。趣味としてコレ持っている

というものであれば、その分野については少なくともそれを持たない人よりは秀でていなければならぬ。勿論、趣味の度を通り越して道楽の域に入ってしまう危険性を持っている人もいないではないが、趣味を持つにしても、その道を極めるにしても容易ではないはずである。いま現在この世知辛い世の中、趣味に活きるなんてことはなかなか出来ない。ましてや道楽に生きるなどとは夢のまた夢であろう。

しかし、何はともあれ「趣味は読書」、自分のプロフィールのなかでは大手をふって堂々と生きている。これはかつて或るところで見せて頂いた老人クラブの会員名簿の趣味の欄に「テレビ鑑賞」とか「昼寝」・「酒飲み」と記した人と同じ感覚だったとしたら、何ともほほえましい限りである。何のことはないこれらを繋ぎ合わせると、テレビを付けたまま缶ビール片手に寝ころがって写真週刊誌に見入っている自画像であるり、現代に生きる一人の日本人の姿として素直に喜ぶべきことであろう。ここで一句、趣味読書マンガ新聞週刊誌 嗚呼！（吉成）

編集人

斎藤典生（茨城大学人文学部）

野内正美（茨城県立太子一高）

石井喜志夫（元教員）

小澤園彦（元教員）

吉成英文（太子町社会教育課）

編集発行

遊 中 文 の 会

太子町立中央公民館歴史資料室気付

久慈郡太子町大字池田 二六九番地

☎三九三三

☎〇五五二二六